

## 生物多様性なごや戦略 第3回策定会議（要点）

日時:平成21年3月27日(金) 10時00分～12時10分

場所:名古屋市公館1階

出席者:

### < 策定会議委員 >

氏名	専門家会議	しみん検討会議	所属・役職等	出欠
安田 喜憲	座長		国際日本文化研究センター教授	出席
向井 清史	委員		名古屋市立大学大学院経済学研究科教授	出席
海津 正倫	委員		名古屋大学大学院環境学研究科教授	出席
芹沢 俊介	委員		愛知教育大学自然科学系生物領域教授	欠席
辻本 哲郎	委員		名古屋大学大学院工学研究科教授	出席
下田 路子	委員		富士常葉大学環境防災学部教授	出席
土屋 泰広	委員		(株)コンボン研究所取締役	出席
千頭 聡	委員	世話人	日本福祉大学国際福祉開発学部教授	出席
香坂 玲	委員	世話人	名古屋市立大学大学院経済学研究科准教授	欠席
長谷川 明子		世話人	生物多様性アドバイザー	出席
広田 奈津子		世話人	生物多様性アドバイザー	出席
新海 洋子		世話人	なごや環境大学実行委員	出席
内木 哲朗		世話人	中津川市職員	出席
矢部 隆		世話人	愛知学泉大学コミュニティ学部教授	出席

### < 事務局出席者 >

氏名	所属・役職等
山田 雅雄	副市長
加藤 正嗣	名古屋市環境局長
神下 豊	名古屋市環境局理事
小林 明生	名古屋市環境局環境都市推進部長
増田 達雄	名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室長

## 第2回策定会議のまとめについて

増田

前回のブレインストーミングのまとめを資料2に示した。まちづくり、くらしづくり、ひとづくりの3つのイメージで色分けして示した。後の議論の土台としたい。前回コーディネーター(千頭委員)の補足事項はあるか。

千頭

特にない。

安田

このように戦略をイメージで示すのに、3つという数は適切である。

## 「名古屋戦略」原案 歴史編・現状編 について

増田

(資料3<生物多様性なごや戦略 各項目の流れ>及び資料4<生物多様性なごや戦略 たたき台>の内容についてパワーポイントで説明)内容について、意見を伺いたい。

海津

第3章の「なごやの活かすべき特色と改善すべき課題」を意識して、2章、3章を書くことが大事である。良い点がどのように現在に至ったか、阻害要因がどのように増えてきたのか。

土屋

生物多様性なごや戦略のたたき台はストーリーがわかりやすく示されている。第3章の「なごやの活かすべき特色と改善すべき課題」について、「改善」を何によって判断するのか、これをしっかり示すべきである。

安田

たたき台では、事務局がデータを揃えただけであり、何を未来に活かすか、その方針を示すのは、委員の役割である。

千頭

自然環境が失われてきたことはわかるが、生物多様性の観点が弱い。いかに多様な空間があるかが大事である。例えば、トンボの種類数を他の都市と比較するとか。また、まちづくりは身近なところにいるいろいろな環境が全部あるということが大事である。

食べ物を例に、くらしの多様性を脅かすものをあげているが、自給率というのは、生物多様性の観点からすると弱い。

向井

2章の3の1で、お祭りや稲作など多様な文化があるのではないかと記載すべきである。文化的な衰退もわかるよう示すべきである。

現在の名古屋の良いところの評価では、田舎のほうがパフォーマンスが良いことになる。名古屋市が果たすべき機能を考慮して、良い点、改善点を示さないと名古屋の将来が見えてこない。

辻本

データブックとしてよくまとめている。ただし、生物がこの地域にどのように移動してきたか(名古屋の地域の種の起源)という部分が欠けている。

名古屋に水が豊富というのは、水資源を木曾川から収奪しているだけではないのか。

なごや戦略は、生物多様性の中での戦略が原点である。原点に戻って考えることが必要である。多様性に富んでいるというのは、何でも種類数が多いというわけではない。地域で機能を分担しながら固有性を出すようにすることが大事。種の数のポテンシャルがこのくらいで、本来ならこのくらいであるというものがわかると、目指すべき多様性や固有性が見えてくる。

安田

p22とp35の図で、今のほうが種類数が多いのは修正すべきである。また、辻本委員の話を図に示せるとよい。

下田

植物を中心に指摘したい。名古屋の固有性について、特色を示すべきである。専門用語は避けること。また、p8で常緑樹と落葉樹という表現をしているが、具体的な名前を出してほしい。

昔の植物について、花粉分析(?)で、このような種類がいたというのでも示してほしい。

東海丘陵要素のコラムがあるが、このような湿地に行ったことがある人が少ないと思われるので、湿地の景観写真を添えるとよい。モウセンゴケやホザキノミミカキグサなどの食虫植物があり、貧栄養で、ハッチョウトンボがいることも示すとよい。

p15の図で、松の木がまばらにはえているのがわかるが、焼き物との関わり、山の木を伐採して松しか残っていないことも示すべきである。山からの収奪があり、自然に取っては大変な時代だったが、多様な生物がいたという表現にすべきである。現在アカマツが減って、常緑樹が増えているが、これは本来の自然に戻っている姿である。

p21で都市は里山から取るだけで、何も返していない。木を切ったり、草を刈ったりする関わりが里山を維持しているというほうが表現としてはよい。

p43,44植物の情報を入してほしい。データは多いはずである。

安田

植物については、取り上げられていないので、事務局は再考するように。

千頭

p21の図で、「間伐材・下草利用」の箇所で、資源の移動と利用が混乱している。

安田

森林管理ではなく収奪ではないか。

矢部

名古屋ではデータの集積がないので、生物相の比較ができない。生物多様性センター(箱物)が必要である。たたき台は、よく作られているが、中身が薄っぺらである。

p8の生物で、この地域では、ダルマガエルはナゴヤダルマガエル、トウキョウサンショウウオはカスミサンショウウオである。また、名東区で爬虫類のシロマダラが確認されている。淡水魚についても、東海地区では、四万十川より1.5倍の淡水魚の種類数があり、ウシモツゴ、ネコギギなど貴重な魚もいる。これらについても、センターがあれば情報提供ができる。

長谷川

p6の「太古」は、いつの時代なのか示すべきである。p22の図は、なぜこれが出てきたか理由付けが必要である。p27の緑被率は、担保された緑地を抜くともっと少ない。p36では、質の問題の記載がない。在来種がいなくなったことを明記すべきである。

p41では、いきものためのまちを作ったわけではない。人間にとって暮らしにくいことをいうべきである。生物多様性を論じるとき、未来につなげるため、普遍性、歴史性を明示するべきである。

新海

現在の内容では、ちょっと距離があるように感じる。生物多様性の喪失が自然にとってどういうことか、どうメッセージするかが大事である。いきものくらせるまちがどういうことなのか言えないとダメである。昔の伝統と知恵を取り入れるというストーリー。また、経済や新しい産業へつなげることが大事である。それにあわせた見せ方も考えてほしい。

## 「名古屋戦略」展望編・実践編 について

増田

(資料-5 <生物多様なごや戦略 展望編・実践編のイメージ> について説明)

辻本

新海委員の述べたことを、何によってドライブしてゆくか、ビジネスや経済につなげる仕掛けを入れ込む必要がある。

土屋

これらを実践するのは市民であり、市民にわかりやすくを示すべきである。それには、キャッチフレーズを出して、一般人を巻き込む必要がある。21世紀を感じて、共感する人を増やす必要があるが、ここが議論のしどころである。

広田

東谷山の尾張戸神社に古代種のもち米があり、しめ縄に利用されている。これを5月のアースデイ愛知にもってきて植えるというプロジェクト(歳時記プロジェクト)を予定している。

長谷川

名古屋はカメの名前の着く神社が多い。水脈との関連で結びつくのでは。

矢部

実現のための3つの柱を立てているが、3つは平等でなく、順序がある。ひとづくり 暮らしづくり まちづくりの順序である。人が知識を持つことが一番重要で、それにはセンター設立が大事である。かたく考えないで、手がつくところからはじめるべきである。

千頭

なごや戦略は行政地域だけで行うのではない。今の行政区域に限定することはない。どういう空間で議論すべきか気になる。

内木

緑はただの緑ではだめである。森林計画で経済林から見直しが必要である。例えば、広葉樹を増やすとか。使う側が変わらないと、変わらない。ひとづくりをやっていくべきである。

加藤局長

p55,56の良い点悪い点は表裏一体である。名古屋の特徴は、低地と大地と丘陵である。その3つに我々は制約を受けている。p19,20は出発点で、自然条件に左右された最後の時代を表す。昔は、自然からの「収奪」であるが、現在は、生態系サービスをあてにしない「抹殺」となっている。適材適所といっただけでは薄っぺらだが、このようなことを知らない人でもわかりやすく示せたらよい。

神下

食べ物を大事にすることが大事。

副市長

現時点としては、なごやの範囲を伊勢湾流域でとらえたらどうか。水循環、木材、食べ物、いきものの循環、上流中流下流の経済循環でのまとめ、その中で、名古屋を考えるのが重要である。

名古屋は水が豊でポテンシャルはある。器としてのポテンシャルは高い。中川運河、堀川、庄内用水など水路が多い。また、矢田川水系をはじめとして地下水が豊富で、これは名古屋の特色である。